

「反抗」の一形式としての「自己」の不在

小池高史（横浜国立大学大学院）

0 はじめに

本報告では、ガーフィンケルの行なったある違背実験において、実験者が被験者に反抗的だと認定されたケースからヒントを得て、相互交渉場面でのある種の対応が、反抗的とみなされる形式に注目し、その提示を試みる。

ここでは、反抗的だとみなされる当人の内に、実際に反抗する意思があるかどうかは問わない。ある相互行為場面で、反抗が当事者にとっても第三者にとっても観察可能になること、そこに焦点をあてる。

1 ガーフィンケルの違背実験

ガーフィンケルは、いくつかの有名な違背実験の一つとして、学生たちに、彼らの家庭で自らを下宿人であると仮定し、その仮定を行為に表しながら過ごすように指示した。そこで学生たちは、家族と馴れ馴れしくすることを避け、堅苦しい口調で受け答えをし、語りかけられた時にだけ話をするという態度をとった。

そこで、被験者である家族から得られた反応は、困惑や怒りであり、実験者である息子や娘の態度のいくつかは反抗的だと見なされた。

ガーフィンケルは、その結果から家族生活の基盤、日常生活の基盤を解明しようとしたが、これを家庭生活において困惑や怒りが生まれる一つのケースとしてそのままみることもできる。

（一般的に期待される事柄への）違背状況は、何も実験場面に限って出現するわけではない。それもまた、私たちの日常生活に含まれている。先の例で、家族が困惑や怒りを示したのは、その違背をどのように

認めるかについての規範に従ってのことである。犯罪が、犯罪と認識されるために犯罪の概念を必要とする（つまり、正常な現象でなければならない）のと同じように、違背が日常生活の基盤を揺るがすためには、それが日常生活に組み込まれていなければならない。

それは反抗の認定が行なわれる場面を想定してみても、同じことが言えるだろう。以下では、反抗認定場面において用いられる、何が反抗的なのかについての知識を析出していく。

2 期待される「自己」の不在

ここで提示する相互交渉場面で反抗と認定される形式は、期待される「自己」の不在とよべるものである。これは映画のシナリオを題材として、そこに書かれている親-子、教師-生徒等の会話場面で、反抗が観察可能である発話を取り出し、検討した結果発見したものである。

「自己」の不在とは、「自己」を表す応答の不在のことである。それは、「自己」の不在と呼ばれる前に、まず「応答の不在」として見出される。しかし、そこでどのような応答が期待されているのかといえば、それは「自己」を示す応答なのである。

また、ここでいう「自己」は西阪が相互行為分析により捉えようとした「心」に含まれる概念であるかもしれない。ここで「自己」という言葉を使うのは、「反抗」が観察可能になる場面において、単なる「心」とは違う、主義をもった「反抗的な自己」が観察可能となるからだ（「自己」の不在が観察されることと「自己」が観察されることは表裏一体であり、同時に起こる）。

「自己」の不在と「反抗」が観察可能になる契機は、その直後の発話ターンでの相手の応答

に委ねられている。たとえば、インタビュー場面で(インタビュアーとインタビュイーという関係で)、インタビュイーの応答の不在があっても、それはしばしばインタビュアーの問いに原因が求められ、「自己」の不在や「反抗」が観察可能になることはない。

観察可能な応答の不在が、「自己」の不在と認められない場合があるといっても(実際、数としてはその方が多数派だろう)、それはもちろん「自己」が認められるということではない。応答の不在が、他の何かに意味づけられた形で観察可能になる。ということつまり、「自己」の不在はいきなり「自己の不在」として観察可能になってくるということである。

3 反抗的でない「自己」の不在

たとえ「自己」の不在が観察可能となる場合でも、それが「反抗」と認定されないこともある。しかも以下に提示する形式においては、「自己」が不在であること自体が反抗的でないことの根拠として利用されている。

報告者が行なったある高校の教員たちに対する聞き取りにおいて、「最近の生徒は反抗的でなくなってきた」という言葉が得られた。その談話は、「反抗的でない」ことを調査者に納得させるために、期待された応答の不在がその根拠として構成されていた。

これは、ここまで述べてきたことと矛盾しているように聞こえる。しかしその場にいた調査者は、映画のシナリオを読み「反抗」に納得できたのと同じように、その話を納得して聞くことができた。

このことを理解するためには、ここで「使用可能な自己」という概念を用意する必要がある。相互交渉場面で「自己」の不在が観察可能になる時、同時に「心」の中に使える「自己」があるかどうか観察可能になるのである。

それらの談話で教師たちが再構成しようとする相互交渉場面は、使える「自己」の不

在が観察可能になるために、「自己」の不在が反抗(的)ではないとの認定を受ける根拠となるケースである。

つまり、「自己」の不在が「反抗」の一形式として観察可能になるためには、「本当は「自己」があるのに、あえてそれを提示していない」ということが観察可能になることが必要なのである。

4 考察

以上に述べてきたことからわかることは、日常に偏在する違背状況は、解釈しうる幅の広いものとして現れることがあり、ある人物が「反抗的」であるだとか、ある行為が「反抗」だとかいった認定は、それを一つの枠組みで理解する仕方の一形式として現れるのだということである。

とすれば、当然その認定は一つ一つの場面でその都度行なわれるものだということになり、「反抗的な若者」とは、一つ一つの相互交渉場面で生み出されるものだといえる。言い換えれば、「反抗」の認定は「反抗的な若者」のうちに見出されるものではなく、それぞれの相互交渉場面で達成されるものなのである。

参考文献

- H・ガーフィンケル(1995)「日常生活の基盤」
北澤裕,西阪仰訳『日常性の解剖学』マル
ジュ社
西阪仰(1997)『相互行為分析という視点』
金子書房